



Title	慶滋保胤「為大納言藤原卿息女女御四十九日願文」考 ：型の継承と対句表現の独自性について
Author(s)	小西, 洋子
Citation	語文. 2022, 119, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95243
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

慶滋保胤「為大納言藤原卿息女女御四十九日願文」考

——型の継承と対句表現の独自性について——

小 西 洋 子

はじめに

追善願文は、平安時代の貴族社会の忌日法会に際して、願主より依頼を受けた儒者によって作成された漢文の文章である。平安中期頃になると、その形式は故人の身分に応じて定型化されはじめる。鎌倉時代の作文指導書である『王沢不渴鈔』は、追善願文の構成項目を、一番「四種之次第（世間無常通用義・孝行義・仏法賛嘆・悲嘆哀傷）」・二番「聖霊平生生存之様」・三番「病中之様」・四番「逝去之様」・五番「悲嘆事」・六番「日数事」・七番「修善傍経事」・八番「時節景気事」・九番「昔因縁事」・十番「廻向句事有惣別」の十種に分類する。この分類項目に従って追善願文の型を捉えることは、すでに山本真吾氏の『平安鎌倉期に於ける表白・願文の文体研究』（汲古書院、二〇〇六年）第三部「願文の文体」や、渡辺秀夫氏の「願文研究の一視点」『平安朝文学と漢文世界』（勉誠社、一九九一年）に詳しい。例えば、九番「昔因縁之

事」は天皇の死を釈迦の死になぞらえるものであるが、これは故人が上皇の願文に書かれる特有の表現である。また、項目の順番としては、同じく故人が上皇の場合は、七番「修善傍経事」が冒頭に置かれる。このように、故人の身分に応じて、構成項目の有無や順番に差異がある。ただし、ここに挙げたとおり故人が上皇のような場合はある程度まとまった数が遺されているため、『王沢不渴鈔』の分類項目に従って体系的にその型を捉えられてきたが、それ以外の願文については、まだ詳しく分析されていない。

さて、「為大納言藤原卿息女女御四十九日願文」は、『本朝文粹』卷十四所収の慶滋保胤によって作成された願文である。本願文は、寛和元年（九八五）閏八月に花山天皇の女御藤原低子の四十九日の法会に際して作成されたもので、願主は低子の父藤原為光である（以下、本願文を低子願文と称す）。低子は、永観二年（九八四）十月に入内し、翌月花山天皇の女御となったが、寛和元年七月、懷妊中に満十六歳という若さでこの世を去った。願文には、そ

の低子の生涯が描かれるが、この点は次節以降で詳しく見ていくとして、ここでは本願文の先行注釈を確認しておきたい。まず挙げるべきものは、先に掲げた渡辺論文である。この他の主な注釈としては、柿村重松氏の『本朝文粹註釈』（富山房、一九六八年）、井上辰雄氏の『慶滋保胤』（井上辰雄先生を偲ぶ会、二〇一六年）などがある。また、渡辺論文では、低子願文のように故人が女性の願文の特徴として、『白氏文集』による粉飾が著しいことが詳述されている。従って、本願文の典拠や語句の特徴については、改めて論じるまでもない。

本稿は、低子願文の故人が女御であるという点に注目し、先行する願文との比較を通じて、本願文の型を見出し、そこからその特徴を論じるものである。先行する願文の中で、同じく女御が故人であるのは、『為左大臣息女女御修四十九日願文』（『本朝文粹』巻十四・420）という願文である。故人は村上天皇の女御藤原述子、願主は述子の父藤原実頼である（以下、述子願文と称す）。天暦元年（九四七）十一月、述子の四十九日の法会に際して、大江朝綱によって作成されたもので、述子願文は、故人の身分だけではなく、故人と願主の、娘と父という関係も低子願文と共通している。故人の身分が女御のもので伝存しているのは、管見の限り両願文しか見出せないが、これらと比較すると、故人が女御という願文にも型があったと考えられる。以下、述子願文との比較を通して、本願文が述子願文の型を継承している点を明らかにしながら、本願文の独自性を見出したい。

一 低子願文の全文と概要

まずは、本節にて願文の全文を掲載し、概要を確認する。全体は、六段に分けた。

為大納言藤原卿息女女御四十九日願文

【第一段】弟子為光、前白仏言、夫、天不為世之貪生而輟其死、命不以人之惡夭而長其齡。誠是、自然之理、有涯之悲也。

【第二段】弟子有一息女、最所鍾愛也。素思進燕寢、不欲混俗塵。

去年、初促二八廻之桃李、得列八十余之綺羅。彼、才色雖非絕代、恩寵亦不愧人。清涼之春花日遲、或賜共翫、弘徽之秋月夜永、不許独看。弟子、雖思溫樹之不語、難忍德沢之有余。従其夢結蘭芬、心祈蓬矢。有身暫退陋巷、有禁久在掖庭之故也。

【第三段】當時時、累旬有恙、万方不痊。於是、天使相望雲泥之間、手命欲滿巾箱之裏。弟子、上泣聖明之恩、下泣父子之愛。去七月終即世矣。

【第四段】昔日、李夫人之反魂尚可勞方士、大長者之出孕竊欲恨如来。哀哉、片時不見鬱腸宛如千万秋。痛矣、一夕相離老淚已且四十余日。弟子、欲訪旅魂而未由、故因金人以為使。將通音信而無便、兼写宝偈以代書。不聞于今仁王垂哀憐。不知又我老身忘寢食。

【第五段】及于忌辰、奉図絵。法華曼陀羅一摺。奉書写。金字妙法蓮華經一部八卷、開結、阿弥陀、般若心等經各一卷。便於法

性寺敬以奉供養。所生功德、銷滅累業。

【第六段】努力莫為人中之雲雨。自愛不受天上之快樂。又、欲其奈此五障何。欲其奈彼五衰何。弟子、早引幽靈偏在極樂。弥陀尊之設蓮台、望上品又仰下品矣。法華經之說仏果、令我女不異龍女焉。彼即身也。是後身也。何疑哉、何疑哉。人皆有才無才各言其子。仏願有罪無罪定救我兒。乃至、六趣四生、莫不引接。敬白。

寛和元年 月 日

(訓読文)

大納言藤原卿息女女御の爲の四十九日願文

【第一段】弟子爲光、前みて仏に白して言く、夫れ、天世の生を貪る爲に其の死を輟めず、命人の夭を惡むを以て其の齡を長くせず。誠に是れ、自然の理、有涯の悲なり。

【第二段】弟子一の息女有り、最も鍾愛する所なり。素より燕寝に進めむことを思ひて、俗塵に混ぜむことを欲はず。去年、初めて二八廻の桃李を促し、八十余の綺羅に列なることを得たり。彼の、才色代に絶えたるに非ずと雖も、恩寵亦人に愧ぢず。清涼の春花日遅くして、或は共に翫ぶことを賜ひ、弘徽の秋月夜永くして、独り見ることを許さず。弟子、温樹の語らざることを思ふと雖も、徳沢の余り有るに忍び難し。其夢に蘭芬を結びし従り、心に蓬矢を祈る。身有りて暫くして陋巷に退くは、久しく腋庭に在るの禁有る故也。

【第三段】斯の時に当たりて、累旬恙有り、万方すれども痊へず。

是に於いて、天使雲泥の間に相望み、手命巾箱の中に満ちなむとす。弟子、上は聖明の恩に泣き、下は父子の愛に泣く。去七月終に即世す。

【第四段】昔日、李夫人の魂を反すも尚ほ方士を勞し、大長者の孕を出すも竊かに如来を恨まむ。哀しいかな、片時も見ざれば鬱腸宛も千万秋の如し。痛しいかな、一夕相離るれば老涙已に四十余日に且とす。弟子、旅魂を訪ねむと欲ふも未だ由なく、故に金人を圖きて以て使ひと爲す。音信を通せむとすも便り無く、兼ねて宝偈を写して以て書に代ふ。聞かずや今仁王哀憐を垂るるを。知らずや又我が老身寢食を忘るるを。

【第五段】忌辰に及びて、図絵し奉る。法華曼陀羅一填。書写し奉る。金字妙法蓮華經一部八卷、開結、阿弥陀、般若心等經各一卷。便ち法性寺に於いて敬ひて以て供養し奉る。所生の功德、累業銷滅せよ。

【第六段】努力人中の雲雨と爲ること莫れ。自愛して天上の快樂を受けざれ。又、其の此の五障いかむせむとす。其の彼の五衰いかむせむとす。弟子、早く幽靈を引いて偏に極樂に在らしめむ。弥陀尊の設くる蓮台、上品を望み又た下品を仰がむ。法華經の説く仏果、我が女を龍女と異ならざらしめむ。彼は即身なり。是は後身なり。何ぞ疑はむ、何ぞ疑はむ。人皆才有るも才無くも各其子を言ふ。仏願はくは罪有るも罪無くも定めて我が兒を救ひたまへ。乃至、六趣四生、引接せざれむ

こと莫れ。敬ひて白す。

寛和元年 月 日

各段ごとに概要を見ていこう。第一段、冒頭は人の命が永遠ではないことを嘆くことから始まる。第二段は、祇子の生前の様子が描かれる場面。入内して女御となり、花山天皇の寵愛を一身に受けたことを述べる。第三段では、病に臥し、逝去したことが述べられ、続く第四段で、その死を悼む悲嘆表現が記される。第五段では、法会で奉納された絵画と経典が記される。そして第六段にて、祇子の極楽往生が祈願され、本願文は締めくくられる。

まず注目されるのは、花山天皇の寵愛が深かったことを顕著に記している第二段である。花山天皇が祇子を寵愛したことは、『栄花物語』が記すところでもある。そのため、本願文は『栄花物語』とともに、花山朝を論ずる中で言及されることもあるが、本稿では、天皇の寵愛を願文の中で描くことを、追善願文の型の中に位置づけていきたい。次節以降、第二段、第三段及び第四段を述子願文と比較していく。

二 入内から逝去までの描写

本節では、第二段、第三段を述子願文と対応させながら、祇子願文の特徴を詳しく見ていきたい。両願文の対応する箇所をA、B、C、Dに分類した。対応箇所が分かりやすいよう行間を空けているが、両願文ともに一連の文である。

述子願文		祇子願文	
A	伏 ^{シテ} 惟 ^{レバ} 、 女御贈從四位上藤原朝臣者、弟子最 小之兒也。 養 ^{ハレテ} 在 ^リ 深窓 ^ニ 、外人不 ^レ 識 ^ス 。 去年、 素思進燕寝、不欲混俗塵。 初促二八廻之桃李、 得列八十之余之綺羅。	弟子有一息女、最所鍾愛也。	
B	蕙心春浅 ^ク 、未 ^レ 及 ^ニ 三二八之齡 ^ニ 、 蘭質秋深 ^ク 、初 ^{メテ} 備 ^フ 三千之列 ^ニ 。 常 ^ニ 念 ^フ 、 一家之子孫、附 ^テ 門戸 ^ヲ 於其願 ^ニ 、 滿園之草木、期 ^ス 榮枯 ^ヲ 於彼恩 ^ニ 。	彼、 才色雖非絕代、 恩寵亦不愧人。 清涼之春花日遲、或賜共翫、 弘徽之秋月夜永、不許独看。 弟子、 雖思温樹之不語、 難忍德沢之有余。 從其 夢結蘭芬、 心折蓬矢。 有身暫退陋巷、 有禁久在掖庭之故也。	
C			

D	
何 _ソ 図 _{ラム} 、	当期時、
楽未 _レ 央 _カ 、哀先 _ソ 至 _ル 。	累句有意、
福漸 _ク 始 _ム 、禍早 _ク 成 _ル 。	万方不痊。
花 _ノ 前 _二 辞 _シ 恩、不 _レ 見 _レ 掖庭之月 _一 。	於是、
灯 _ノ 下 _二 告別、長 _ク 失 _レ 朝露之光 _一 。	天使相望雲泥之間、
	手命欲滿巾箱之裏。
	弟子、
	上泣聖明之恩、
	下泣父子之愛。
	去七月終即世矣。

まず、A及びBには内容、語句ともに共通点が見出せる。Aでは、願主と故人の関係が提示され、いずれも娘であることを示す。Bでは、入内し女御となったことが記される。低子願文の「燕寝」は、天子の夫人の部屋。低子願文「素思_レ進_二燕寝_一、不欲_レ混_二俗塵_一」と述子願文「養在_二深窓_一、外人不_レ識」は、表現は異なるものの、いずれも世俗とは交えず大切に養育されたことが述べられている。また、低子願文「初促_二二八廻之桃李_一、得_レ列_二八十余之綺羅_一」という表現は、明らかに述子願文の「未_レ及_二二八之齡_一」、「初備_二三千之列_一」を踏襲している。「二八」は、十六歳の意であるが、うら若い女性の妙齢をいい、入内したことを示す。「八十」は、『後漢書』卷十上・皇后紀序文「周礼、王者立_二后、三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一女御_一」とあるように女御のこ

と指す。述子願文の「三千之列」は、白居易「長恨歌」（白氏文集卷一二596）の「後宮佳麗三千人 三千寵愛在一身」を踏まえたもので、后妃を示す。このようにA、Bは、両願文ともに、故人と願主の関係を記し、入内、女御となるという経歴を述べるという構成になっている。また、語句としても、入内や女御を数詞の対を用いて表現するという点が共通している。まずはここから、低子願文が述子願文の型を継承していることが窺える。⁽²⁾

続いてC、Dを見ていきたい。これらは一見すると、重なる部分がないようにも見えるが、Cでは天皇の恩沢が描かれること、Dでは逝去を描く場面でも宮中や天皇が示されるという点に共通点を見出すことができる。

Cから見ていこう。低子願文では、低子が花山天皇の寵愛を一身に受けていたことが描写される。それは、「清涼之春花日遅、或賜_二共翫_一、弘微之秋月夜永、不_レ許_二独看_一」のように、白居易「上陽白髮人」（白氏文集卷四131）の「秋夜長 夜長無_レ寐天不_レ明 耿耿殘燈背_レ壁影 蕭蕭暗雨打_レ窓声 春日遲 日遲独坐天難_レ暮 宮鶯百轉愁厭聞 梁燕双棲老休妬」を踏まえて描かれる。「上陽白髮人」では、玄宗の寵愛を受けなかった上陽人が、秋の夜長も春の遅遅たる日も、独りで恨めしく過ごしたことをいうが、本願文ではこの表現を逆手に取り、低子は天皇の寵愛を十二分に受けたことを表現している。さらにこの句に続き、「恩寵亦不_レ愧人」や「難_レ忍_二德沢之有余_一」と、天皇の寵愛が深く、その恩徳は身に余るほどであったと、天皇の恩沢が称えられている。この

点に注目し、述子願文を確認してみよう。「一家之子孫、附^二門戸於其願^一」とある。「門戸」は一門のことで、「願」は、天皇が心を掛けることを示す。本句は、述子の入内によって実頼一門が村上天皇の恩恵を被ること表現している。このように見ると、「一家之子孫」の対である「満園之草木」も実頼一門の喩えであろう。つまり「一家之子孫……」と「満園之草木……」の隔句対は、述子の入内によって実頼一門が天皇の恩恵を受け、繁栄することを期待していたことを述べている。こうして見ると、娘の入内を記した後、天皇の恩沢を述べるという構成は、両願文に共通した型といえるだろう。ただし、天皇の恩徳の描かれ方は異なっている。低子願文では、「雖^レ思^二温樹之不語^一」として、宮中のことはみだりに話すべきではないと断りつつ、花山天皇とともに花や月を翫んだと、入内後に一身に注がれた寵愛を具体的に記し、花山天皇と低子の情愛を描写する。一方の述子願文では、述子の入内によって一門の繁栄を期したことを隔句対で記すのみで、述子の入内後の様子を描くことはない。この点は、両願文の対照的な点といえるだろう。

Dでは、病に臥して逝去したことが書かれる。低子願文では、「天使相^二望雲泥之間^一 手命欲^二滿^一巾箱之裏^二」とあるように、病中の低子のもとに、天皇の使者が幾度も往来し、天皇手ずからの手紙が小箱に満ちあふれた、とどこでも天皇の寵愛を強調する。さらに続いて「上泣^二聖明之恩^一、下泣^二父子之愛^一」とあり、天皇の恩徳に謝す句も記される。対する述子願文を見てみよう。述子

願文では、「樂未^レ央、哀先^レ至、福漸^レ始、禍早^レ成」と暗に逝去を記した後、「花前^レ辭^二恩、不^レ見^一掖庭之月^一、灯下^レ告^二別、長失^二朝露之光^一」という隔句対が続く。「掖庭」は、宮中正殿わきの建物で皇妃・宮女がいる後宮のこと。「朝露」は、はかないものの喩えで逝去をも連想させるが、これは天皇の恩沢を指すものだろう。花の前に恩寵に別れ、宮中の月を見ることは無く、灯の下に別れを告げ、長らく天皇の恩沢を失ってしまった、と述子の逝去によって、天皇の恩恵を失ったことを表現している。病に臥した後も天皇の寵愛が厚かったことを描く低子願文とは、この点も対照的であるが、病中、逝去が記される文脈においても天皇や宮中を表す語が示されるのは共通している。つまり、故人が女御の願文では、入内から逝去を描くにあたって、常に天皇の恩徳や宮中を意識し、女御という身分を強調した描き方がなされるのである。この点を踏まえると、低子願文で天皇の寵愛が描かれることも、型としては故人が女御という願文の型を逸脱したものではないだろう。しかし、天皇の恩徳を花山天皇と低子との情愛として描き、低子の入内から逝去までを一連の流れとして描写するのは、本願文の特徴と捉えられるのではないだろうか。述子願文と比べると、本願文はストーリー性を持つ描写となっているといえるだろう。⁽⁶⁾

三 悲嘆表現の種類と特徴

前節に続く場面を見ていこう。本節で検討するのは、悲嘆表現の箇所、ここもDから続く一連の文である。

述子願文				
E 4	E 3	E 2	E 1	
荒原送終之時、混 ^ニ 松風 ^ニ 而添 ^テ 哭 ^フ 。	去夏哀情ノ毒焰、在 ^{レリ} 胸 ^ニ 而未滅 ^セ 。 今冬啼眼ノ寒氷、承 ^ケ 華輦 ^ニ 而無 ^シ 乾 ^ク 。 漢宮人内之夜、傍 ^ニ 華輦 ^ニ 而成 ^シ 歎 ^ヲ 。	悲 ^シ 之又悲 ^シ 、瓊苗同 ^ク 枯 ^ル 於 ^ニ 芝畝 ^ニ 。	泣 ^キ 而更 ^ニ 泣 ^ク 、玉卵共破 ^レ 於 ^ニ 煙巢 ^ニ 。 迷惑失 ^レ 抱 ^ヲ 、似 ^レ 入 ^リ 重霧之中 ^ニ 。	宛転不 ^レ 閑、如 ^シ 臥 ^ニ 鋪炭之上 ^ニ 。
E 4	E 5	E 1	E 2	
不知又我老身忘寢食。	欲訪旅魂而未由、故園金人以為使。 將通音信而無便、兼写宝傷以代書。 不聞于今仁王垂哀憐。	弟、 哀哉、片時不見歸腸宛如千万秋。 痛矣、一夕相離老淚已且四十余日。	李夫人之反魂尚可勞方士、 大長者之出孕竊欲恨如來。	低子願文

両願文ともに悲嘆表現は四聯で構成されている。各聯ごとに見ていくと、悲嘆表現の種類をおおよそE1―E5に分類できる。E1は願主の悲しみの深さを様々な事象を以て喩えたもの、E2は故人の特徴を踏まえながら悲嘆を示したもの、E3は昔時と今時を意識しながら悲嘆を示したもの、E4は宮中(漢宮)や天皇(仁王)を記し、女御という身分を反映させながら悲嘆を表現したものである。E5は、やや悲嘆表現と捉え難いところもあるが、故人と音信を通ずることはできないので、便りの代わりに仏像を描いた絵画や書写した経典を以て故人を弔おうという表現である。完全に一致するというわけではないが、E1、E2、E4の表現のパターンは、両願文ともに共通している。中でも、E2の表現の在り方を見ておきたい。

述子願文の、「玉卵」、「瓊苗」は胎児の喩えで、「煙巢」、「芝畝」は母体の喩え。「煙巢」は燃えてしまった巢のことで、「芝畝」の「芝」は枯れた木に生える。それらにあった「卵」や「苗」も絶えてしまったというので、述子が懷妊中に亡くなったことを表現している。低子願文でこれに対応するのは、「李夫人之反魂尚可勞方士」大長者之出孕竊欲恨如來である。まず、「李夫人……」は、白居易「李夫人」(白氏文集卷四¹⁶⁰)の故事を踏まえる。漢の武帝の後妃であった李夫人の魂を降臨させた反魂香もその秘薬を調合した方士を徒勞に終わらせるという意。李夫人の後妃という身分と低子の女御という身分を重ねた句であろう。述子願文と共通するのは、「大長者……」の方である。これは、『涅槃經』(卷三十・師子吼菩薩品第十一之四)に見える故事に拠るものであるが、故事の内容は次節で詳述するので、ここでは本句の大意を示しておく。天竺の大富豪の妻は、火葬中に仏の功德によって男子を出産したが、娘(低子)にはそのような奇瑞も起こらず、その悔しさは人知れず仏を恨むほどである、という意である。懷妊中に亡くなったという特徴を踏まえながら悲嘆を表現する点は、述子願文の表現方法が踏襲されている。しかしここでも、両願文の表現の在り方には差異がある。低子願文では、「李夫人……」において女御という身分を、「大長者……」において懷妊中に逝去したという特徴を表現している。一方述子願文では、前句と後句の双方で懷妊中に逝去した悲しみを記している。そしてこのような表現の違いは、一聯ごとではなく、悲嘆表現全体を見た場合、よ

り明確になる。述子願文のE3、E4に注目したい。再掲しよう。

3 去夏哀情毒焰、在胸而未滅。

E 今冬啼眼寒氷、承眦而無乾。

4 漢宮入内之夜、傍華輦而成歎。

E 荒原送終之時、混松風而添哭。

E3は、去る夏の悲しみもまだ癒えておらず、また述子が亡くなった今冬の涙も乾くことがない、といった意である。「去夏哀情」はおそらく述子の前年天暦元年（九四七）五月に亡くなった「藤原実頼女」と称される、源高明の正妻であつた実頼の娘を指すと考えられる。つまり「去夏哀情」と「今冬啼眼」は、前年に続いて今年も娘を喪つたという悲しみを対句で表現している。E4では、入内時と葬送時の対比によって喜びと悲しみを対照的に描いている。E3とE4はいずれも、昔時と今時という時間経過を対にして悲しみを表現しているのである。こうして見ると、述子願文の、E1・E2・E3・E4は、各聯ごとが独立しており、それぞれの隔句対の中で前句と後句を整然と対照させるような作り方になっている。こうした述子願文の特徴と比較してみると、低子願文は述子願文のように、各聯ごとに完結させた対句を作るというよりも、全体の文脈を承けた対句を作成しているくらいがある。それが最も表れているのが、先に見た「李夫人……」の隔句対であると考えられる。この句について、次節で詳しく見ていこう。

四 低子願文の独自性——「李夫人之反魂尚可劳方士

大長者之出孕窃欲恨如来」の技巧——

二節で言及したように、低子願文は、述子願文に比べると、ストーリー性を帯びた描き方になっている。そこで「李夫人之反魂尚可劳方士」「大長者之出孕窃欲恨如来」に注目すると、これらは前後の文脈を意識して作成されており、それ故に本願文のストーリー性がより高められていると考えられる。本節ではこの点を見ていきたい。

まず、前句「李夫人之反魂尚可劳方士」から検討しよう。これは、E5の「欲訪旅魂而未由、故因金人以为使。将通音信而無便、兼写宝偈以代书」と照応していると考えられる。これは先述した通り、故人と音信を通ずることはできないので、便りの代わりに仏像を描いた絵画や書写した経典を以て故人を弔おうという表現である。「李夫人之反魂尚可劳方士」がこれを承けていると考えられるのは、空海「三嶋大夫为亡息女書写供養法花経講説表白文」（性霊集卷八七）に同様の展開が見えるからである（以下、三嶋表白文）。

有「鍾愛女息」。婦容具而至孝、婦德備而醺人。……誰因四大毒蛇忽闕「身城」。五蘊惡鬼乍乱「心府」。洗胃名医針灸無驗、返「魂妙香空焚無」力。……雖「朝夕流涙」「日夜含」顰、無「益亡魂」。是故、為「濟亡兒覺靈」。謹奉「写金字妙法蓮花経一部般若心経一卷」、兼延「五十八法侶」、講「宣妙経

奥義

まず、三嶋表白文も「有^レ鍾愛女息」とあるように、父が娘を供養するために作成されている。注目したいのは、ここでも「返^レ魂妙香空焚無^レ力」と、死者の魂を甦らせる反魂香を焚いても結局意味はないと述べられることである。これは、東方朔の『十州記』に見える仙境にある反魂樹という木の根から取った香を死者にかがすと甦るという故事に拠るとされる。低子願文では、同じく反魂香の故事を用いるにあたり、その典拠を「李夫人」とすることで、低子の女御という身分を強調していることが窺える。典拠の問題については、なお検討の余地はあるが、ここでは三嶋表白文と低子願文の展開が共通していることに注目したい。三嶋表白文でも反魂香の無力を述べた後（波線部）、悲しんでも亡き魂には意味がないので經典を供養する（破線部）という展開になっている。これは低子願文で、E2「李夫人之反魂尚可^レ勞^二方士^一」と反魂香の故事を踏まえ、そしてE5「欲^レ訪^二旅魂^一而未^レ由……」と、故人と音信を通ずることはできないので、便りの代わりに画像を描いた絵画や書写した經典を以て故人を弔おう、という展開と重なる。三嶋表白文と低子願文に直接的な関係があったか否かは別として、低子願文以前に右のような展開を持つ枠組みが存在していたことが窺える。E2「李夫人之反魂尚可^レ勞^二方士^一」は、その枠組みを意識して、E5「欲^レ訪^二旅魂^一而未^レ由……」に照応するように作られたと考えられる。

続いて、後句「大長者之出^レ孕窃欲^レ恨^二如来^一」も見ていきたい。

これは、二節で見たCの部分の、「夢結^二蘭芬^一、心祈^二蓬矢^一」を意識していると考えられる。「夢結^二蘭芬^一」は、『春秋左氏伝』宣公三年に記される故事とされる。鄭の文公の妾の夢に天の神が現れ、蘭を与えたのち、妾が身ごもり、文公の子（穆公）を身ごもったということを踏まえて、低子の懐妊を表している。「蓬矢」は、蓬で羽をはいだ矢で、桑弧とともに、悪鬼・邪神などを除く魔除けの道具とされる。これは『礼記』に記される儀式に基づいて、皇子の誕生を祈念したことを表している。ここで注目したいのが「蘭芬」である。「蘭芬」は、蘭のかおりであるが、女性を形容する語でもあるので、「蓬矢」との対として見ると、皇女を意味すると考えられる。つまり、「夢結^二蘭芬^一、心祈^二蓬矢^一」は、低子は懐妊したものの、それは皇女であることを夢に見たので、皇子の誕生を祈願したと解することができるのではないか。このように解すると、この箇所が「大長者之出^レ孕窃欲^レ恨^二如来^一」の故事に繋がっていることが分かる。『大般涅槃經』（卷三十・師子吼菩薩品第十一之四）の本文を一部掲げながら概要を確認しよう。

チャンパー都に大富豪がいた。大富豪は跡継ぎがいなかったが、六人の思想家に祈禱してもらい、その効き目によって妻が懐妊する。富豪は大喜びして六人の思想家に生まれてくる子が男子か女子を問うと、女子だと言われ悲しむ。それを見た智者がどうしてそんなに悲しんでいるのかと問うと富豪は、「我婦懐妊、未^レ知^二男女^一、故問^二六師^一」。六師見^二語如我相法^一、生必是女。我聞^二是語^一、自惟年老、財富無^レ量。如^レ其非男無^レ所^二付嘱^一、是故我愁」。

と、女の子であると巨額の財産を継がせることができないので、そのことを憂いているという。これを聞いた智者は、「汝無^レ智慧^一。……如來世尊於一切法知見無^レ礙、故名爲^レ仏。發言無^レ二、故名^三如來^一。……如來今者近在此住。若欲^三實知^一、當詣^三仏所^一」と、六人の思想家とは違い、釈迦はあらゆることを自在に見ることのできる方で、それ故にブツダと呼ばれ、發言に二言はないから如來と呼ばれている。その釈迦が今近くに来ているから、生まれてくる子の性別を知りたければ、釈迦に尋ねると良いと言い、富豪とともに釈迦のもとを訪れる。富豪の問いに対して釈迦は、「長者、汝婦懷妊、是男無^レ疑。其兒生已福德無^レ比^一と、生まれてくる子はおそらく男の子で、家に計り知れない福德をもたらすだろうという。これを聞いて大喜びした富豪は帰宅する。しかしこの釈迦の予言を聞いて嫉妬した六人の思想家は、マンガーの果樹を混ぜた毒薬を長者の家に持つて行く。そして「汝婦臨月、可^レ服^三此藥^一。服^三此藥^一已兒則端正、產者無^レ患^一と、この薬を飲むと母子ともに思いがいいだろうと言って、長者を騙す。騙された長者は喜んで薬を受け取るが、妻は死んでしまった。これを知った釈迦は、邪見を取り除くために富豪が茶毘に付している墓場に向かう。大富豪は、釈迦に「所^レ言無^レ二、可^レ名^三世尊^一。母已終亡云何生子^一と、ブツダには二言なしと言ったのに妻は死んでしまったと不満の言葉を述べる。これに対して釈迦は、「長者、卿於^三爾時^一、都不^レ見^三問^一母命修短^一。但問^三所^レ懷爲^三是男女^一。諸仏如來發言無^レ二。是故當^レ知。定必得^レ子^一と、あなたはあの時妻

の命の長短は訊かなかった、ただ生まれてくる子どもの性別だけを訊いた。私には二言はない、だから必ず男の子を得るだろうと答える。するとこの時、焼かれた妻の死体の腹が裂け、その中から赤子が出てきて、火の中に端座した。その姿は、鴛鴦が蓮華に座っているようだという。それは、「是時死屍火燒腹裂、子從^レ中出端^三坐火中^一。猶^レ如^三鴛鴦處^一蓮花台^一」と記される。この後、赤子は火の中から取り出され、その場にいた人々は釈迦の神通力を見て釈迦に帰依したとして、この説話は閉じられる。

この説話の主眼が釈迦の功德によって死した母体から胎児が誕生したというところにあり、「大長者之出^レ乃子窃欲^レ恨^三如來^一」がこの話を逆手にとつて忤子の死を悲嘆する表現であるのは確かである。しかし、もう一つ重要と考えられるのは、生まれて来る子の性別を巡つて、六人の思想家と釈迦の予言の対立したのが事の発端となつてゐることである。おそらく保胤は、この点も踏まえて本説話を用いたのではないか。「大長者之出^レ孕窃欲^レ恨^三如來^一」が「夢結^三蘭芬^一、心折^三蓬矢^一」を承けた句と見ることで、願主が光が男子の出生を強く望んでいたことがより強調されるのではないだろうか。

以上のように、「李夫人之反魂尚可^レ勞^三方士^一、大長者之出^レ孕窃欲^レ恨^三如來^一」の、「李夫人……」は、後の「欲^レ訪^三旅魂^一而未^レ由……」と、「大長者……」は前の「夢結^三蘭芬^一……」と呼応させた句で、これらは前後の文脈と接続させながら、作られていることが窺える。これ故に本願文は、忤子の入内・逝去を描く場

面から悲嘆表現に入るまでの展開に連続性があり、全体として物語性を帯びたものとなっていると考えられる。

おわりに

本稿では、低子願文を述子願文と比較することで、故人が女御である願文の型を見出した。入内から逝去を描くにあたつて天皇の恩徳や宮中を表す句を示すことで、女御という身分を強調した描き方がなされている点は両願文の共通するところである。また、悲嘆表現においても各聯ごとに見ると、懷妊中に逝去したことを踏まえながら悲嘆を表現することなど、その表現のパターンにも共通性が見られた。従つて、願文の型としては、低子願文も述子願文の型を継承しており、故人が女御の願文という型を意識して作成されたものといえるだろう。ただし、天皇の恩徳を低子との情愛として一連のストーリーのように描く点、「李夫人之反魂尚可_レ勞_二方士_一」、大長者之出_レ孕窃欲恨_二如来_一」という前後の文脈を包括した悲嘆表現が用いられる点は、本願文ならではの特徴である。これらの特徴ゆえに本願文は全体として物語性を帯びており、ここに本願文の独自性があるだろう。

また、本願文が述子願文と比べてもう一つ特徴的なのは、「弟子、上泣_二聖明之恩_一、下泣_二父子之愛_一」、「不_レ聞于今仁王垂_二哀憐_一、不_レ知又我老身忘_二寢食_一」というように、花山天皇（聖明）、「仁王」と為光（父子）・「老身」が対で示されていることである。追善願文の表現主体には、作者と願主という二重の主体があ

るが、低子願文では述子願文に比べて、願主為光の主体が強く表れており、さらに天皇の存在も提示されている。これによつて、低子を寵愛した花山天皇、皇太子誕生を待ち望みながらそれが叶うことなく、娘の死の悲嘆に暮れる為光という人物が願文の中に明確に浮かび上がる。この点も本願文を物語たらしめる要因の一つだろう。本願文は、願主為光と花山天皇という人物を対句表現を以て願文の中に巧みに反映させている。作者保胤の文人としての技量をも窺うことができる作品であらう。

注

(1) 花山院の低子に対する寵愛については、『今井源衛著作集9 花山院と清少納言』（笠間書院、二〇〇七年）「花山院の生涯」、新問一美「桐壺更衣の原像について―李夫人と花山院女御低子―」（『源氏物語と白居易の文学』（和泉書院、二〇〇三年）に詳しい。なお、新聞論文では、願文の表現と『源氏物語』の関わりを指摘する。

(2) ここに見た述子願文の表現は、渡辺論文「願文研究の一視点」語釈の中で用例として掲げられている。なお、渡辺氏の低子願文の注釈は、「王朝願文の世界」（『日本文学史を讀むⅡ 古代後期』・有精堂出版・一九九一年）にも所収されている。

(3) 「長恨歌」にも「姉妹兄弟皆列_レ土可_レ憐光彩生_二門戸_一」と、玄宗皇帝の恩恵によつてが楊貴妃一門が繁栄したとある。また、「長恨歌伝」（『白氏文集卷二二』）には「雖_レ有三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一御妻、暨後宮才人、樂府伎女、使_二天子無_レ顧盼意_一、自_レ是六宮無_レ復進幸者_一」とある。「顧盼」という熟語ではあるが、「願」が皇帝の寵愛を示す語として用いられている。

(4) 『漢書』に見える故事で、朝廷内のことをみだりに口にしない、思

慮深さを喻えたもの。『漢書』卷八十一・孔光伝「時有所言、輒削二草稿一。以為章二主之過一、以奸二忠直一、人臣大罪也。有レ所二薦舉一、唯恐二其人之聞知一。沐日歸休、兄弟妻子燕語、終不レ及二朝省政事一。或問光、溫室省中樹皆何木也。光默不レ応、更答以二他語一、其不レ泄如是」とあり、漢の孔光が、宮中の温室殿にどんな木がはえているかと家人に聞かれても、黙って答えなかったという。『蒙求』にも「孔光温樹」として所引される故事で、日本でもよく用いられる。

(5) 「露」が天皇の恩沢を指すのは、菅原道真「九日侍宴、同賦二紅蘭受レ露、応製」(菅家文章卷一・70)に「臣幸著レ緋恩沢渥」と見える。「緋」は紅色の衣で五位の官職が着すもので、道真を指す。つまり、「著レ緋」が題の「紅蘭」を、「恩沢」が「露」を言い換えている。

(6) 管見の限り、皇妃(三后、女御)が故人の願文の中で、天皇との情愛を描くことは、祇子願文以外に例を見ない。もともと、追善願文に夫婦の情愛が描かれるのは、故人が妻で願主が夫である場合が多いが、皇妃が故人の場合は、願主が夫(天皇)になる例はなく、願主と故人の關係に拠るところが大きいと考えられる。なお、三后が故人の場合は、個人が願文を依頼するのではなく、その中宮職や皇后宮職といった家政機関が依頼するのではなく、拙稿「追善願文の書式と願主―『本朝文粹』所収『花山院冊九日御願文』と『為二品長公主冊九日願文』を巡って―」(和漢比較文学) 68・二〇二・二(二)参照。願主と故人の關係がどのように願文の中に反映されるのかという点も含め、願文における情愛の描かれ方については、なお検討の余地があるだろう。

(7) 悲嘆表現の様々なパターンについては、渡辺論文「願文研究の一視点」にも詳しい。

(8) 白居易「李夫人」の当該場面は以下の通り。

漢武帝、初哭李夫人。……又令方士合二靈藥一、玉釜煎鍊金炬焚九華帳中夜悄悄、反魂香降夫人魂。夫人之魂在二何許一、香煙引到焚香處。既來何苦不二須臾一、縹緲悠揚還滅去。去何速兮來何遲、是耶非耶而不知。翠蛾鬢髯平生貌、不レ似昭陽寢疾時。魂之不レ來君心苦、魂之來兮君亦悲。背レ燈隔帳不レ得語、安用暫來還見レ違。

(9) 「朝野群載」卷二に「源高明正嫡乳母諷誦文」という四十九日の諷誦文があり、これが「藤原実頼女」のために書かれたものと考えられる。本諷誦文の文中には「左丞相之愛子、右金吾之正嫡。則是賤妾所レ奉二乳養一也。」とあり、末尾に「天曆元年七月八日」という年月日が記されている。『公卿補任』によると「左丞相」は左大臣実頼、「右金吾」は右衛門督源高明である。従って、本諷誦文が源高明の正妻であった実頼の娘のために作成されたもので、その時期は述子願文の前年であったことが分かる(『大日本史料』一八、九四九頁以下参照)。

(10) 悲嘆表現に今時と昔時を対照的に表現することが多いことは、渡辺論文「願文研究の一視点」にも言及されている。

(11) 三嶋表白文は、渡辺注釈「願文研究の一視点」の掲げる語釈の中に用例として指摘がある。

(12) 三嶋表白文に用いられる反魂香の故事が『十州記』に拠ることは、『三教指帰性靈集』(日本古典文学大系)及び「弘法大師空海全集 巻六」(筑摩書房、一九八四年)の指摘による。

(13) 「春秋左氏伝」宣公三年に「冬、鄭穆公卒。初、鄭文公有二賤妾一、曰二燕姑一。夢天使与二己蘭一。曰、余為二伯儵一。余而祖也。以是為二而子一。以蘭有二国香一、人服二媚之一如是也。既而文公見レ之、与二之蘭一而御レ之。辞曰、妾不才。幸而有レ子、将レ不レ信。敢徵二蘭乎一。公曰、諾。生二穆公一。名レ之曰二蘭一」(藝文類聚卷八十一・蘭にも所引)とある。

(14) 『礼記』「内則」に「国君世子生、告于君、接以三大牢。宰掌其具。三日、卜士負之。吉者宿齐、朝服、寝门外待负之。射人以桑弧、蓬矢六射、射天地四方。保受乃负之。宰醴負子、赐之束帛。卜士之妻、大夫之妾、使食子」とある他、「射儀」にも「故男子生、桑弧蓬矢六射、以射天地四方。天地四方者、男子之所履事也。故必先有志於其所履事、然後敢用穀也。飯食之謂也」とある。

(15) 「新安長公主墓誌銘」(藝文類聚卷十六・公主)には「誕茲明淑、玉振蘭芬、譽宣女師、德作高行」と、皇女に用いられている他、日本でも桑原腹赤^一奉^レ和^レ傷^レ野女侍中^一とある。一首(文華秀麗集卷中84)に「柳絮文詞身後在、蘭芬婦德世間伝」とある。なお、先行注では「蘭芬」が皇女であるか否かという点に言及はない。

使用テキスト

本朝文粹—身延山本久遠寺本『重要文化財本朝文粹』(汲古書院・一九八〇年)〔新日本古典文学大系(岩波書店)の作品番号を付した〕

※低子願文の「大長者」は底本では「火長者」となっている。本箇所は『涅槃経』及び真福寺本(冊子本)に従い、「大長者」に校訂した。なお、真福寺本は『漢文学資料集』(真福寺善本叢刊12・臨川書店)所収の影印を参照した。

性霊集—『定本弘法大師全集 卷八』(密教文化研究所、一九九六年)

〔日本古典文学大系(岩波書店)の作品番号を付した〕

文華秀麗集—日本古典文学大系69(岩波書店)

菅家文章—元禄十三年刊本(日本古典文学大系(岩波書店)の作品番号を付した)

朝野群載—新訂増補国史大系(吉川弘文館)

王沢不渴鈔—内閣文庫本

後漢書—吉川忠夫『後漢書 本紀二』(岩波書店、二〇〇二年)
春秋左氏伝・礼記—新釈漢文大系(明治書院)

漢書・藝文類聚—中華書局

白氏文集—『白氏文集歌詩索引』(同朋舎出版、一九八九年)

涅槃経—大正新脩大藏経(第一二巻・No.0374)

※本稿では、引用に際して、漢字の旧字体や異体字を通行の字体に改めた。訓読は適宜改め、句読点を補った。また、特に断らない限り傍線・傍点等は論者による。尚、引用中、「」内は割注を、……は省略を示す。

付記

本稿は、二〇一二年日本学術振興会特別研究員奨励費(課題番号・22J10233「慶滋保胤の願文の研究」)の成果の一部である。

(こにし・ようこ) 本学博士後期課程

日本学術振興会特別研究員